

# 母親からの期待が娘の自己愛傾向に及ぼす影響について

——母娘関係の親密さに着目して——

清水 彩 乃

## I. 問題の所在と本研究の目的

青年期は、職業選択や親からの精神的自立という大きな発達課題に直面しており、自己を肯定的に認知して安定させるために、自己愛傾向が高まるとされている。青年期は、発達課題について、他者から期待や評価を受ける機会も多くなるだろう。その一つとして、親からの期待が挙げられる。親からの期待について、親からの期待に応えることができるのかどうかという期待達成不安が見られている（春日・宇都宮・サトウ, 2013）。このことを始めとし、親からの期待は青年期に様々な影響を与えている要因となっており、青年の自己愛傾向も高めていると考えられる。また、小高（2015）は、母親に対する親和的態度は男性よりも女性に見られており、母と息子よりも、母と娘のほうが親密であるとしている。青年期の女性は、母親との関係が親密であり、その関係の中で母親からの期待を感じ、自己愛傾向を高めていると予想される。したがって、本研究では、娘が感じている母親からの期待が、娘の自己愛傾向を高めているかについて、母娘関係の親密さにも注目して明らかにすることを目的とする。本研究から、青年期の娘の自己愛傾向に関する重要な知見を得ることが期待される。

**自己愛傾向に関する研究** 新見・川口・江村・越中・目久田・前田（2007）は、青年期に自己愛傾向が高まるのは、その時期に職業選択という大きな課題に直面しており、自己評価をする必要にせまられることや、異性や友人などの対人関係が拡大し、多様な評価にさらされることから、自己評価を安定させる必要が生じ、その結果、自己愛傾向が高まるとしている。新見ら（2007）を始めとし、青年の自己愛傾向に関しては多くの研究が展開されている。これら青年期の自己愛傾向についての研究では、自己愛を2種類に大別する捉え方が一般的である。Gabbard（1994）は、自己愛的な人は、対人関係の関わりにおける典型的なスタイルに基づいて想定される連続体の両端にある2つの極に位置するものとして概念付けられるとした。そして、この連続体の一方の極は、周囲を気につけない自己愛者（Oblivious narcissism）であり、もう一方の極は、過剰に気に掛ける自己愛者（Hypervigilant narcissism）と名づけられるとした。周囲を気につけない自己愛者は、周りの人々に自分がどんな影響を与えているかについて全く気付かないように見える、自分に夢中であり、注目されたいとはっきり思っている、他者の欲求に鈍感である、といった性質を有している。他方、過剰に気に掛ける自己愛者は、他の人々が自分にどう反応するかについてきわめて敏感である、内気で自己消去的である、自分が拒絶され軽蔑されるだろうと確信しており、人の目につくことを避ける、といった性質を持つ。周囲を気につけない自己愛者は、自分の業績を他の人に印象付けようとする。一方、過剰に気に掛ける自己愛者は、傷つきやすい状況を回避し、どう振る舞えばいいか他の人を研究することで、自己評価を維持しようとする。新見ら（2007）は、青年期は養育者から精神的に自立し、自分自身の特徴に基づいて自己構造を構築することが求められている時期であるとし、自己を肯定的に評価し、自己構造を構築するための一つの要因として自己愛傾向を挙げている。どちらのタイプにあっても、自己評価を維持しようという目的は共通しているが、その対処の仕方が異なっている（Gabbard, 1994）と言える。

**自己愛傾向の定義について** 本研究では、これまでの自己愛傾向の研究を踏まえ、自己愛傾向を2つのタイプに分けて考える。中山・中谷（2006）は、自己愛傾向の自己価値、自己評価を維持する機能に着目している。彼らはGabbard（1994）の理論に基づいて、「誇大型自己愛傾向」と「過敏型自己愛傾向」の2つのタイプを提案しており、本研究でもこの定義を用いて分析を行う。「誇大型自己愛傾向」は「他者によらず自らを肯定的に認識することで自己価値・自己評価を肯定的に維持しようとするはたらき」であり「過敏型自己愛傾向」は、「他者によ

って自己価値・自己評価を低められるような証拠がないことを確認することによって自己価値・自己評価を肯定的なものとして維持しようとするはたらき」である。中山・中谷 (2006) の分類は、自己愛傾向を自己価値や自己評価の維持という機能的側面から概念化したものである。彼らの研究では、「誇大型自己愛傾向」が高い青年は、他者に影響されることなく自己に対する肯定的な感覚を維持でき、適応的である一方、「過敏型自己愛傾向」が高い青年は、他者に影響されやすく、傷つきやすい自己評価をし、不適応な要素を持つことが示された。このことから、自己愛傾向は、自己評価や自己価値を安定させることが大きく関わっていると考えられる。自己に対する肯定的な感覚を維持し、自己像を構築する必要があるため、そのために自己愛傾向が高まることになる。青年の自己愛傾向を高める要因の一つとして、親からの期待が挙げられる。親からの期待については、青年の自立に関係していることが先行研究で示唆されている。伊藤 (2009) は、母親からの期待に対してプレッシャーを感じている大学生は、母親との関係を肯定的に認知しているが、同時に母親からの自立を求める関係変化の志向も認められるとしている。また、親からの期待を肯定的に認知している大学生は、親との距離が近く、親と似た姿勢で似た行為をしているとの指摘もある (河村, 2003)。上記から、青年は親からの期待によって、自立や自己像の確立を試みている一面もあると考えられる。そのため、親からの期待は、自己評価や自己価値の安定に関わっている自己愛傾向を高めている重要な要因であるといえる。

**親からの期待の定義** 河村 (2003) は、親からの期待を「競争社会の中で、常に上を目指す上昇志向を親が抱くことによる期待」であると定義している。さらに、市毛・大河原 (2009) は、親が子どもへ託す様々な期待を「親もしくは他者から見て“よい子”であってほしいという望み」という観点から捉え、よい子願望と名付けている。これらの先行研究によると、親が子どもに抱く期待は、子どもが社会的に認められて欲しいという願望が背景にあることが伺える。そこで本研究では、親からの期待を「親が子どもに対して向けている、子どもの将来に実現してほしいと望んでいる期待」と定義する。

**親からの期待が子どもに及ぼす影響** 市毛・大河原 (2009) は、社会的場面でよい子であってほしいという親からの期待を感じている子どもは、社会的場面での賞賛や評価によって自尊感情が高まっているとしている。春日・宇都宮・サトウ (2014) は、期待に対して負担感を感じながらも期待に応え、期待に応えることで自己抑制的な性格傾向を高め、自己抑制的な性格傾向の高まりによって再び無理をして期待に応えるというサイクルがあると示唆している。また、女性に関しては、期待されているという認知自体が自尊感情を高めていることが明らかになっている。これらのことから、親からの期待は青年に様々な心理的影響を与えていることがわかる。尚且つ、女性にとって、親からの期待は自己を肯定的に維持するための重要な要因であることが明らかにされている。さらに、春日・宇都宮 (2011) によると、女性は母親から期待されていると感じること自体が自尊感情を高める要因になっており、男性よりも強く親からの期待を意識していると考えられている。自己愛傾向と自尊感情は類似した概念であるといわれており (新見ら, 2007)、母親からの期待は自己愛傾向も高めている可能性があると考えられる。春日・宇都宮 (2011) によると、女性は、母親に対して情緒的繋がりを感じ、積極的に期待に応えることが示唆されている。このことから、母と娘の関係は、他の親子関係よりも距離が近いことが考えられ、青年期の女性は、母親からの期待によって自己愛傾向を高めていることが考えられる。実際に、水本 (2018) は、母娘関係は他の組み合わせの親子関係と比較して距離が近いことを明らかにしている。このことから、青年期の女性の自己愛傾向の高まりには、母親からの期待が関係していることが考えられる。さらに、母親からの期待の感じ方は、母娘関係の親密さによって異なることが推測される。そのため、本研究では女性の自己愛傾向を高めている母親からの期待を要因として検討する。そして、女性を感じている母親からの期待の程度は、母娘関係の親密さによって異なることが考えられるため、母娘関係の親密さも要因として検討する。

**母娘関係の親密さについて** 水本 (2016) は、娘が母親に抱く親密性を、母親との心理的距離の近さや母親との情緒的絆を示す心性であるとし、「娘が母親への接近欲求に基づいて抱く親愛的情緒」と定義している。本研究で検討する娘が母親に抱く親密さは、娘が母親に対して感じている情緒的な結びつきが強いかどうかによって影響が異なるという視点が重要であると考えられる。そのため、母娘関係の親密さの定義は水本 (2016) の親密性と同意であると考え、本研究でもこの定義を用いた。

**母娘関係の親密さが娘に及ぼす影響** 母親との距離が近い娘の方が、自己の価値観よりも、母親や社会の価値観を受け入れて適応していることが明らかになっている (水本・山根, 2011; 小高, 2015)。水本・山根 (2011)

は、親子関係の中でも母と娘の関係に注目しており、青年期の娘が母親から精神的に自立していくプロセスを、母親との信頼関係と母親からの心理的分離という両側面から捉えている。結果として、母親との信頼関係を築き心理的に分離している娘は、自己の価値を認めることができ、母親の価値観に捉われず自己決定をし、自律的に行動する様相が見られることが明らかになっている。このことから、母親との関係の中で自己像を確立している娘と、母親の価値観に依存して自己像を確立しようとしている娘がいることが考えられる。

**本研究の仮説** 以上を踏まえて、以下の2つの仮説を立てた。

**仮説1.** 娘の誇大型自己愛傾向は、母親からの期待に影響され、その影響は母娘関係の親密さによって異なるだろう。つまり、期待高群では、母娘関係の親密さ高群の方が、母娘関係の親密さ低群よりも、誇大型自己愛傾向が高いが、期待低群では、母娘関係の親密さ低群の方が、母娘関係の親密さ高群よりも誇大型自己愛傾向が高いだろう。

**仮説2.** 母親との親密さの程度に関わらず、母親からの期待が低い場合に比べて、期待が高い場合の方が、過敏型自己愛傾向が高いだろう。但し、母娘関係の親密さが高い方が、母娘関係の親密さが低い場合よりも、母親からの期待が低い場合と高い場合を比べて過敏型自己愛傾向の高まり方は大きいだろう。

## II. 方 法

### 1. 調査方法及び調査時期

関西地方に所在する私立女子大学の女子大学生 224 名の協力を得た。有効回答率は、93.8%であった。データの収集時期は、2018年5月から6月であった。

### 2. 調査手続き

大学の講義時間終了後に無記名の質問紙調査を実施した。本研究の目的とプライバシーの保護、調査への参加は本人の自由意志であることを、文書と口頭で説明を行い、受講学生に調査への協力を依頼した。調査に関する質問等に対応するため、調査用紙の最後のページに研究責任者の連絡先を記載しており、調査票から引き離せるようにした。

### 3. 倫理的配慮

2017年12月に行われた甲南女子大学の研究倫理委員会にて承認を受けた後、実施した（承認番号：2017023）。研究の目的と方法、プライバシーの保護、匿名性、研究後の処分方法について、調査の参加は任意であることをフェイスシートへ記載し、依頼した学部長から授業担当教員を紹介して頂き、研究者が直接配布し回答を求めた。フェイスシートに研究同意の有無をチェックする欄を設け、『同意する』に印をつけることを調査への同意とした。

### 4. 調査票について

母親からの期待に関する質問項目市毛・大河原（2009）によって作成された「親のよい子願望尺度」と河村（2003）によって作成された「親から感じる期待尺度」を用いた。市毛・大河原（2009）の「親のよい子願望尺度」は、親のよい子願望に関する17項目の質問からなり、学校社会よい子、感情自律、家庭内よい子の3つの下位尺度から構成されている尺度である。本研究では、「いい成績を取ること」等の学校社会よい子因子8項目と、「落ち込まないこと」等の感情自律因子6項目の14項目を用い、5件法で回答してもらった。

河村（2003）の「親から感じる期待尺度」は、親からの期待に関する23項目の質問からなる尺度であり、進学・学業期待、社会への適応期待、就職期待、従順・見栄期待、苦勞への報い期待の5つの下位尺度から構成されている。本研究では、「公務員などの安定した職業についてほしい」等の就職期待因子4項目を用い、5件法で回答してもらった。なお、「国家資格取得と結びつくような学部を選んでほしい」の項目は、調査対象者が大学生であるため「国家資格取得と結びつくような学部であってほしい」に表現を変更して使用した。

**自己愛傾向に関する質問項目** 中山・中谷 (2006) によって作成された「評価過敏性-誇大性自己愛尺度」を用いた。18 項目の質問からなる尺度であり、誇大性、評価過敏性の 2 つの下位尺度で構成されている。「私には持って生まれた素晴らしい能力がある」等の誇大性 10 項目と、「他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が価値のない人間になったような気がする」等の評価過敏性 8 項目を用い、5 件法で回答してもらった。

**母娘関係の親密さに関する質問項目** 水本 (2016) によって作成された「母親への親密性尺度」を用いた。母親への親密性に関する 19 項目の質問からなる尺度であり、母親への心づかい、母親への絶対的安心感、母親への価値観の捉われの 3 つの下位尺度から構成されている。本研究では、「母親には本音が言える」等から成る、母親への絶対的安心感 5 項目を用い、5 件法で回答してもらった。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 項目分析結果

用いた質問項目の項目分析を行った結果、床効果がみられた項目を削除し、分析を行った。測定した尺度の平均値と *SD*、得点範囲、項目数をまとめたものを表 1 に示す。

#### 2. 各尺度の構成

**母親からの期待に関する質問項目** 親のよい子願望尺度 (市毛・大河原, 2013) について、探索的因子分析を行った (最尤法, プロマックス回転)。 $\alpha$  係数の値と、各項目の因子負荷量を表 2 に示した。因子負荷量が .40 以下であった「礼儀正しいこと」の項目を削除し、残りの 13 項目を分析に用いた。その結果母親からの期待として 2 因子が抽出された。市毛・大河原 (2013) と同様の因子構造となった。第 1 因子は「学校社会よい子因子」であり、第 2 因子は「感情自律因子」であった。これら 2 つの因子は、先行研究通りになった。

親から感じる期待尺度 (河村, 2013) について、主成分分析を行った。 $\alpha$  係数の値と、各項目の因子負荷量を表 3 に示した。分析の結果、第一成分で全分散の 60.4% が説明可能であったため、次元尺度とみなして差し支えないと判断した。したがって、4 項目の合計得点を「就職期待因子」とした。各項目の負荷量、 $\alpha$  係数の値を表 3 に示した。

**自己愛傾向に関する質問項目** 評価過敏性-誇大性自己愛尺度 (中山・中谷, 2006) の 17 項目について、探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った。分析の結果、先行研究通り 2 因子が抽出された。各項目の因子負荷量、 $\alpha$  係数を表 4 に示した。第 1 因子を、「誇大性」、第 2 因子を「評価過敏性」とした。

**母娘関係の親密さに関する質問項目** 母親への親密性尺度 (水本, 2016) の 5 項目について、主成分分析を行った。分析の結果、第一成分で全分散の 66.2% が説明可能であったため次元尺度とみなして差し支えないと判断した。 $\alpha$  係数の値と、各項目の負荷量を表 5 に示した。先行研究と同様に、母親が無条件に自分の情緒的欲求を受け入れてくれるという安心感に基づく態度を示す質問項目がまとまったため、水本 (2016) に倣い、「母親への絶対的安心感」とした。

#### 3. 仮説の検証

母親からの期待と、母娘関係の親密さを独立変数、2 種類の自己愛傾向を従属変数として、2 要因分散分析を行った。

表 1 下位尺度得点の平均と標準偏差

	平均	<i>SD</i>	得点範囲	項目数
誇大型自己愛傾向	2.4	0.7	1-5	9
過敏型自己愛傾向	3.1	0.8	1-5	8
学校社会よい子	3.5	0.9	1-5	8
感情自律	2.5	0.8	1-5	6
就職期待	3.2	1.0	1-5	4
母親への絶対的安心感	3.7	1.0	1-5	5

表2 親のよい子願望尺度

	1	2	共通性	平均値	SD
第1因子：学校社会よい子因子 ( $\alpha = .89$ )					
良い成績を取ること	<b>.92</b>	-.09	.78	3.4	1.2
成績が上位であること	<b>.88</b>	-.11	.73	3.3	1.2
テストでいい点を取ること	<b>.83</b>	-.11	.64	3.4	1.2
勉強ができる子であること	<b>.80</b>	.01	.61	3.1	1.2
テストで8割以上の点数を取ること	<b>.76</b>	.12	.59	2.6	1.2
成績を落とさないこと	<b>.68</b>	.11	.49	3.4	1.1
真面目に努力すること	<b>.52</b>	.10	.37	3.7	1.1
第2因子：感情自律因子 ( $\alpha = .76$ )					
愚痴を言わないこと	-.04	<b>.71</b>	.41	2.3	1.1
落ち込まないこと	.04	<b>.70</b>	.43	2.3	1.1
人に嫌なことをされてもイライラしないこと	-.12	<b>.60</b>	.32	2.8	1.1
泣かないこと	.05	<b>.54</b>	.32	2.1	1.0
同じ失敗を繰り返さないこと	.24	<b>.51</b>	.34	3.2	1.1
何でもかんでも人(親)に聞かないで自分で考えること	.03	<b>.48</b>	.21	2.8	1.2
因子間相関	第1因子	-	.12		
	第2因子	.12	-		
累積寄与率 (%)	35.4	54.7			

削除項目礼儀正しいこと

表3 親から感じる期待尺度

就職期待 ( $\alpha = .75$ )	主成分負荷量	共通性	平均値	SD
業績の悪いような会社には就職してほしくない	.86	.73	3.4	1.1
公務員などの安定した職業に就いてほしい	.83	.70	3.2	1.2
国家資格取得と結びつくような学部であってほしい	.73	.53	2.4	1.2
景気の波に左右されない会社に就職してほしい	.68	.46	3.0	1.3
累積寄与率 (%)	60.4			

表4 評価過敏性-誇大性自己愛尺度

	1	2	共通性	平均値	SD
第1因子：誇大性 ( $\alpha = .84$ )					
私には持って生まれた素晴らしい才能がある	<b>.74</b>	-.07	.60	2.1	1.0
私は周りの人からもっと高く評価されてもよい人間だと思う	<b>.71</b>	.08	.50	2.1	0.9
私は他に並ぶ人がいないくらい、特別な存在である	<b>.70</b>	.01	.45	2.0	0.9
自分はきっと将来成功するのではないかと思う	<b>.67</b>	-.10	.44	2.3	1.0
自分自身では、要領もいいし、うまく判断のできるような賢さも備えていると思う	<b>.59</b>	-.07	.35	2.2	1.1
私は今まで他の人にはできないような経験を積んできた	<b>.58</b>	.04	.35	2.7	1.2
私の意見通りにすれば、もっと物事が上手く進むのに、と思う	<b>.57</b>	.19	.39	2.4	1.1
自分には、どこか他人を惹きつけるところがあるようだ	<b>.52</b>	-.10	.33	2.8	1.0
自分の考えや感情の豊かさ、感受性にはかなり自信がある	<b>.40</b>	.05	.20	3.3	1.1
第2因子：評価過敏性 ( $\alpha = .85$ )					
自分の欠点や失敗を少しでも悪く言われると、ひどく動揺する	-.11	<b>.76</b>	.56	3.3	1.2
他人から間違いや欠点を指摘されると、自分の全てが否定されたように感じる	.09	<b>.75</b>	.54	3.0	1.2
他人から間違いや欠点を指摘されると、憂鬱な気分が続く	-.05	<b>.71</b>	.49	3.3	1.2
人といると、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる	-.03	<b>.71</b>	.53	3.0	1.2
常に優れた人や目上の人に認めてもらえなければ、自信が持てない	-.02	<b>.66</b>	.45	2.8	1.2
他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が価値のない人間になったような気がする	.09	<b>.52</b>	.34	3.0	1.2
周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる	-.11	<b>.49</b>	.30	2.9	1.3
人に軽く扱われて、後ですごく腹が立つことがある	.17	<b>.47</b>	.30	3.4	1.1
因子間相関	第1因子	-	.08		
	第2因子	.08	-		
累積寄与率 (%)	25.3	46.3			

表 5 母親への親密性尺度

母親への絶対的安心感 ( $\alpha = .90$ )	主成分負荷量	共通性	平均値	SD
母親といるとき自分らしくいられる	.87	.67	3.8	1.1
母親には本音が言える	.86	.67	3.7	1.1
母親に助けを求められる	.86	.68	3.7	1.1
母親とはどちらかといえば距離が近い親子である	.79	.44	3.9	1.1
母親に自分のことをなんでも知っていてほしい	.67	.59	3.0	1.3
累積寄与率 (%)	66.2			

**総合期待** 母親からの就職期待、学校社会よい子期待、感情自律期待の合計得点を、総合期待得点とした。母親からの総合期待についての平均値と SD 及び 2 要因分散分析の結果を表 6 に示した。母親からの総合期待が誇大型自己愛傾向に及ぼす影響を検討するために、娘の誇大型自己愛傾向を従属変数とした、母親からの期待（低群・高群）×母親の親密さ（低群・高群）の分散分析を行った。なお、母親からの期待と母親の親密さに関しては、中央値で高群と低群に分けた。その結果、母親の親密さの主効果のみが有意であった ( $F(1,206) = 5.74, p < .05$ )。母親からの期待によって誇大型自己愛傾向に有意差は認められない一方で、母親の親密さ低群よりも高群の方の誇大型自己愛傾向得点が有意に高い結果となった。

総合期待得点が過敏型自己愛傾向に及ぼす影響を検討するために、娘の過敏型自己愛傾向を従属変数とした、母親からの期待（低群・高群）×母親関係の親密さ（低群・高群）の分散分析を行った。その結果、交互作用主効果ともに有意ではなかった。

**就職期待** 母親からの就職に関する期待の平均値と SD 及び 2 要因分散分析の結果を表 7 に示した。母親からの就職期待が誇大型自己愛傾向に及ぼす影響を検討するために、娘の誇大型自己愛傾向を従属変数とした、母親からの就職期待（低群・高群）×母親の親密さ（低群・高群）の分散分析を行った。その結果、母親の親密さの主効果が有意であった ( $F(1,206) = 6.26, p < .05$ )。母親からの就職期待によって誇大型自己愛傾向に有意差は認められない一方で、母親の親密さ低群よりも高群の方の誇大型自己愛傾向得点が有意に高い結果となった。

母親からの就職期待が評価過敏型自己愛傾向に及ぼす影響を検討するために、娘の過敏型自己愛傾向を従属変数とした、母親からの就職期待（低群・高群）×母親関係の親密さ（低群・高群）の分散分析を行った。その結果、母親からの就職期待の主効果は有意であった ( $F(1,206) = 12.01, p < .05$ )。母親の親密さによって過敏型自己愛傾向に有意差は認められない一方で、母親からの就職期待低群よりも高群の過敏型自己愛傾向得点が有意に高い結果となった。

**学校社会よい子期待** 母親からの、学校社会よい子期待に関する平均値と SD 及び 2 要因分散分析結果を表 8 に示した。母親からの学校社会よい子期待が誇大型自己愛傾向に及ぼす影響を検討するために、娘の誇大型自己愛傾向を従属変数とした、母親からの学校社会よい子期待（低群・高群）×母親の親密さ（低群・高群）の分散分析を行った。その結果、母親の親密さの主効果は有意であった ( $F(1,206) = 5.37, p < .05$ )。母親からの学校社会よい子期待によって誇大型自己愛傾向に有意差は認められない一方で、母親関係の親密さ低群よりも高群の方が、誇大型自己愛傾向得点が有意に高い結果であった。

母親からの学校社会よい子期待が、過敏型自己愛傾向に及ぼす影響について検討するために娘の過敏型自己愛傾向を従属変数とした、母親からの学校社会よい子期待（低群・高群）×母親関係の親密さ（低群・高群）の分散分析を行った。その結果、母親からの学校社会よい子期待の主効果は有意であった ( $F(1,206) = 5.1, p < .05$ )。母親の親密さによって過敏型自己愛傾向に有意差は認められない一方で、母親からの学校社会よい子期待低群よりも高群の過敏型自己愛傾向得点が有意に高い結果となった。

**感情自律期待** 母親からの感情自律期待に関する平均値と SD 及び 2 要因分散分析結果を表 9 に示した。母親からの期待が誇大型自己愛傾向に及ぼす影響を検討するために、娘の誇大型自己愛傾向を従属変数とした、母親からの感情自律期待（低群・高群）×母親の親密さ（低群・高群）の 2 要因の分散分析を行った。その結果、母親の親密さの主効果が有意であった ( $F(1,206) = 5.56, p < .05$ )。母親からの感情自律期待によって誇大型自己愛傾向に有意差は認められない一方で、母親の親密さ低群よりも、高群の誇大型自己愛傾向得点が有意に高い結果で

あった。

母親からの感情自律期待が過敏型自己愛傾向に及ぼす影響を検討するために、母親からの感情自律期待（低群・高群）×母娘関係の親密さ（低群・高群）の分散分析を行った。その結果、交互作用、主効果ともに有意ではなかった。

#### 4. 仮説検証

以上の結果から、仮説について以下の結果が得られた。

1 母娘関係の親密さが強い娘の方が、低い娘に比べて誇大型自己愛傾向が高かった。娘の誇大型自己愛傾向は、母親からの期待に影響され、その影響は母娘関係の親密さによって異なることはなく、仮説は支持されなかった。

表6 期待総合得点の平均と標準偏差及び2要因分散分析の結果

	親密さ	期待高群		期待低群		期待の主効果	母娘の親密さ 主効果	交互作用
		高群	低群	高群	低群			
誇大型自己愛傾向	N	62	53	46	49	0.41	5.735* 高群>低群	0.004
	平均	2.55	2.3	2.56	2.44			
	SD	0.64	0.71	0.73	0.69			
評価過敏型自己愛傾向	平均	3.2	3.2	3.1	3	2.154	0.381	0.169
	SD	0.88	0.81	0.8	0.8			

$p < .05^*$

表7 就職期待の平均と標準偏差及び2要因分散分析結果

	親密さ	期待高群		期待低群		期待の主効果	母娘の親密さ 主効果	交互作用
		高群	低群	高群	低群			
誇大型自己愛傾向	N	56	45	52	57	F 値 0.924	F 値 6.26* 高群>低群	F 値 0.415
	平均	2.5	2.2	2.57	2.39			
	SD	0.59	0.7	0.77	0.66			
評価過敏型自己愛傾向	平均	3.23	3.34	3.1	2.8	12.01* 高群>低群	0.11	3.426
	SD	0.84	0.75	0.85	0.77			

$p < .05^*$

表8 学校社会よい子期待の平均と標準偏差及び2要因分散分析結果

	親密さ	期待高群		期待低群		期待の主効果	母娘の親密さ 主効果	交互作用
		高群	低群	高群	低群			
誇大型自己愛傾向	N	56	47	52	55	3.75	5.37* 高群>低群	0.146
	平均	2.66	2.4	2.44	2.26			
	SD	0.69	0.72	0.65	0.64			
評価過敏型自己愛傾向	平均	3.3	3.1	2.9	3	4.31* 高群>低群	0.23	1.386
	SD	0.78	0.87	0.89	0.76			

$p < .05^*$

表9 感情自律期待の平均と標準偏差及び2要因分散分析結果

	親密さ	期待高群		期待低群		期待の主効果	母娘の親密さ 主効果	交互作用
		高群	低群	高群	低群			
誇大型自己愛傾向	N	55	48	53	54	0.711	5.56* 高群>低群	1.04
	平均	2.5	2.4	2.56	2.2			
	SD	0.67	0.48	0.7	0.68			
評価過敏型自己愛傾向	平均	3.2	3.3	3.1	2.9	3.82	0.314	2.54
	SD	0.93	0.78	0.76	0.8			

$p < .05^*$

2 母親からの学校社会よい子期待及び母親からの就職期待が高い娘は、低い娘に比べて、過敏型自己愛傾向が高かった。しかし、母親からの期待は、母娘関係の親密さによって高まり方が異なることはなかった。そのため、仮説は一部支持された。

#### IV 総合考察

娘の誇大型自己愛傾向について、母親からの期待と母娘関係の親密さの交互作用は見られず、母娘関係の親密さのみが娘の誇大型自己愛傾向を高めるという結果になった。この結果から、母親からの期待に自己を揺さぶられることなく親密な母娘関係の中で自己を肯定的に認識して、自己価値や自己評価を維持する誇大型自己愛傾向が高まっていることがわかった。母娘関係に関して水本・山根(2011)は、母親と信頼関係を築き、心理的に分離している女性は、自己の価値を認めることができ、主体性も高く自律的に行動することができるとしている。小高(2015)は、女性は母親への親和的な態度を示しながら、男性よりも母親とは別の生き方をしようとしている態度が見られていることを明らかにしている。これらのことから、娘は母親との親密な関係の中で自己評価を安定して保つ誇大型自己愛傾向を高めており、母親との関係は、娘の自己に対する肯定的な感覚の維持に関わっていることが考えられる。水本(2016)によると、母親が無条件に自分の情緒的欲求を受け入れてくれるという安心感は、娘の適応的な自立を支えるように働くと推測されている。本研究で用いた母娘関係の親密さである「母親への絶対的安心感」は、母親が無条件に自分の情緒的欲求を受け入れてくれるという安心感を示す親密さであり(水本, 2016)、自分の情緒的な欲求を母親が受け入れてくれることが、女性の自己に対する肯定的な感覚の維持に繋がっているのではないかと考える。以上から、女性は母親との親密な関係によって、安心して自分自身について肯定的に評価する働きを身に着けているといえる。

娘の過敏型自己愛傾向は、母親からの就職期待、または学校社会よい子期待によって高められているが、その高まりは母娘の親密さによって異なることはなかった。青年期は、職業選択や親からの精神的自立という課題に直面しているため、外的な評価を受ける機会が多くなっており、外的な評価を受けた時に肯定的に自己価値を維持することができるように、母親からの期待を自己価値の維持のために取り入れているのではないかと考える。中山・中谷(2006)では、過敏型自己愛傾向は不適応な要素を含んでいると指摘されているが、青年期における過敏型自己愛傾向の高まりは、自己像の再構築のために、他者の評価に依存して自己を肯定的に維持しようとするはたらきであると考えられる。自己愛は「肯定的な自己評価」が脅威にさらされたときに活性化される自己調節過程である(中山, 2008)と考えられている。このことから、自己を再構築するためには、青年期における過敏型自己愛傾向の高まりは必要であり、何らかの形で自己の再構築が完了すると自己評価を安定させることができ、母親からの就職期待および学校社会よい子期待を強く感じることに伴う娘の過敏型自己愛傾向の高まりは弱くなると推測する。

また、母親からの感情自律期待のみが娘の評価過敏型自己愛傾向を高めることはなかった。市毛・大河原(2009)によると、女性は気持ちをコントロールして落ち着いた振る舞いをする、家族を支え助けるなどの役割をこなすことを男性よりも求められやすいことが示唆されている。このことから、感情のコントロールは、母親からの期待を基準にして学んできたものではなく、これまでの社会生活の中で様々な他者との関わりの中で学んできたものであると考える。

中山・中谷(2006)は、中学生以降、多くの青年は自己愛的になることが示唆されている。さらに、自己愛傾向が自己評価に脅威を与える種々の原因、発達の要因等によって高められているとすれば、自己愛傾向は特性的、安定的なものではなく、より状況的なものであると考えられている(中山, 2008)。このことから、青年期の女性の自己愛傾向の高まりは、自己像の構築に必要なことであるといえる。そして、青年期の娘にとって、母親からの期待及び、母親との親密な関係は、青年期の女性が自分自身で自己を肯定的に維持するための重要な要因になっていると考えられる。

## V 本研究の限界と今後の課題

本研究では、娘が母親に対して認知している期待の強さ及び娘が感じている母娘関係の親密さについて回答してもらった。母親が娘に対して抱いている期待、母親が感じている母娘の親密さは視野に入れなかった。そのため、娘が感じている期待が、実際に母親がどの程度娘に対して抱いている期待であるのかは明らかにされなかった。しかし、娘が母親に対して感じている期待や親密さの程度と、母親が娘に対して抱いている期待の程度と親密さの程度には、相違があると考えられる。遠山（1999）は、青年期前期である中学生は、親の期待と自らの目標の間に明確な区別がなされているため、日常生活で意識する親からの期待の受け止め方が異なるとしている。このことから、青年期の子どもと親の期待の一致度は、期待認知に大きく関わっていると考える。今後の研究では、子どもが感じている母親からの期待の程度と、母親が子どもに抱いている期待の程度の一一致度合などを検討課題として調査する必要がある。

また、母娘関係の親密さに関しては、母と娘の情緒的な結びつきに注目し、母親を信頼し、母親からも信頼される関係性を構築することに関する尺度である「絶対的安心感尺度」のみを用いた。しかし、母親にそれまで受けた愛情を返して行こうとする親密性の尺度である「母親への心づかい尺度」、母親の価値基準を気にしてそれを参照しようとする親密性の尺度である「母親への価値観の捉われ尺度」（水本，2016）を用いることで、よりバランスよく青年期の女性の自己愛傾向に及ぼす影響を検討できたと考える。母親への親密さのバランスを考慮して検討していくことを今後の課題としたい。

### 引用文献

- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic personality in clinical practice.: The DSM-IV edition*. Washington: American psychiatric Press. (ギャバード, G. O. 館 哲郎 (監訳) (1997). 精神力動的臨床心理学—その臨床実践 [DSM-IV版] ③臨床篇Ⅱ軸障害 岩崎学術出版社)
- 市毛 陸・大河原美以 (2009). 親のよい子願望が子どもの自尊感情に与える影響：親への依存欲求・独立欲求に注目して 東京学芸大学紀要. 総合教育学系, 60, 149-158.
- 伊藤忠弘 (2009). 大学生の親子関係の認知と親からの期待・プレッシャー経験 —他者志向動機づけを規定する要因の予備的分析— 青山心理学研究, 9, 11-22.
- 春日秀郎・宇都宮博 (2011). 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響 —子どもの吉あに対する反応様式に注目して— 立命館人間科学研究, 22, 45-55.
- 春日秀郎・宇都宮博・サトウタツヤ (2014). 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響：期待に対する反応様式に注目して 発達心理学研究, 25, 121-132.
- 河村照美 (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究, 4, 101-110.
- 小高 恵 (2015). 大学生の心理社会的適応に与える母子関係の影響について 太成学院大学紀要, 17, 39-50.
- 水本深喜 (2016). 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響—「母親への親密性尺度」による検討—, 青年心理学研究, 27, 103-118.
- 水本深喜 (2018). 青年期後期の子の親との関係 —精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差—, 教育心理学研究, 66, 111-126.
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係—「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4 類型モデル」の検討— 教育心理学研究, 59, 462-473.
- 中山留美子 (2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程—自己愛における評価過敏性、誇大性の関連の変化から パーソナリティ研究, 15, 195-204.
- 中山留美子 (2008). 自己愛的自己調整プロセス —一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて— 教育心理学研究, 2008, 56, 127-141.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学, 54, 188-198.
- 新見直子・川口朋子・江村理奈・越中康治・目久田純一・前田健一 (2007). 青年期における自己愛傾向と自尊感情 広島大学心理学研究, 7, 125-138.